
三色

アサオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三色

【Nコード】

N3494G

【作者名】

アサオ

【あらすじ】

桜の花が散り、始まる二人の変わり者が紡ぐ物語り。それはたんなる気まぐれだったけど、大きなスコップを担ぐ憐れな美人と一緒に夜の公園で穴を掘った。

(前書き)

この作品はフィクションです。

とある昼休み。

「おまえ、私と穴掘りしない？」

高校の入学式を終えて早いもので、二週間もすぎた。

人間関係なんて疲れるだけ　なんて思いながら新しい友達なんか作らず、ただ、だらだらと毎日を浪費していた。

少しだけ人相が悪い俺は声をかけられることが少ない。始めのうちは何人かの奴に話しかけられることもあったが、俺がつまらない奴だとわかると進んで関わってくる奴はいなかった。

まあ、そんなもんだ。

漫画や小説じゃない。

この現実につまらない奴の居場所はあるまいもんだ。

そんなわけで、段々とクラスから孤立を始めた俺に、同じく、別の意味でクラスから孤立し始めていた俺の前の席の女が振り返り話しかけてきた。

名前を佐倉田咲那。

他人を寄せ付けない感じの美女。薔薇みtainな感じ、障ったら大怪

我しそう。特徴、ツリ目。

そのせいか、この佐倉田に至っては入学当初から話しかけようとする奴は一人としていなかった。

美人だが、大怪我してまで仲良くなりたいたとは思われない憐れな美人（俺の独断と偏見）だ。

「穴掘り？」

俺が聞き返す。

「そう。それで、する？しない？」

「しない」

「おまえ、ノリ悪いね」

「よく言われるよ」

ノリが良い、悪いに関係なく、急に穴掘りしない？と言われて、了承するほど俺は物好きじゃない。

「それなら、花見に行かない？」

何がそれならだ。穴掘りからなんで花見になったんだ？

「花見なんてもう終わったろ。もうすぐ、五月なんだから」

「それもたまには良いと思うの」

「思わないよ。だいたい、なんで俺なんだ？別のやつさそえよ」

「私はおまえがいいの。おまえじゃなきゃ駄目なの。他のやつじゃ意味がないの」

随分と嬉しいこと言ってくれるな。この女、こういう奴だったのか。

「お願いします。私に付き合ってください」

深々と頭を下げる。

聞き方によっては告白に聞こえないこともない発言。

なんで、俺なんだろうか？

「わかった」

「そう、ありがとね」

素っ気ない返事。

「ただし期待はすんなよ」

俺も素っ気なく返した。

変わった奴だ。

+++++

「その背負ってるでっかいスコップはなんだ？」

一日のすべての授業が終わり放課後。鮮やかな夕暮れ時。

俺は佐倉田と二人で学校から歩いて10分、桜の名所としてそれなりに有名な枯桜公園まで遙々やってきた。

案の定、シーズンを過ぎた桜の木達は揃って花を散らせていて、なんともつまらない景色だった。

おかげさまで、人気も全くない。だだっ広い公園には俺と佐倉田の二人だけだ。

一体、何しに来たんだか。

佐倉田に愚痴の一つでも零そうとすると、佐倉田はそれを予想したのか先手をうって「少し待ってて」と一言、告げて何処かに行ってしまった。

しばらくして、戻ってきた佐倉田なのだが……。

「穴掘りの道具よ」

何処から持ってきたのか、大きなスコップを背負っていた。しかも、二本。

一本は佐倉田自身のものだとして、もう一本はまさか俺用か？

「さあ、一緒に掘ろう」

俺の予想はそのままかで、佐倉田はスコップを一本俺に突き出した。
何なんだよまったく。

「花見に来たんじゃないのかよ。それにだいたい何を掘る気だ」

急に、さあ、掘ろうなんて言われてもどうしようもなかった。

「……土？」

「抽象的すぎだ」

とことん惚けた奴だな。

「具体的に何処を、何のために、掘るんだよ？」

「そうだね。ちゃんと説明しなきゃダメだよね」

当たり前だ。何考えてんだこの女は……。

「桜のね。木の下を掘りたいの。よく言うでしょ、桜の木の下には死体が埋まってるとか、埋まってないとか」

「馬鹿だろ。現実、見ろよ。掘るだけ無駄だ」

「かもね」

佐倉田はそれだけ短く返して、スコップを一本地面に突き刺した。

「でも、私は掘るよ」

ふっと佐倉田の表情が緩んだ。

その綺麗な容姿にぴったりの優しい微笑みが俺に向けられる。

素直に見惚れた。

佐倉田は俺に背を向けて、地面に突き刺したスコップはそのままに、桜の木の下まで歩きだす。

手には一本の大きなスコップ。振り替えらなつた。

「……」

しかし、セーラー服にスコップとはシュールなもんだ。

佐倉田は黙々と桜の木の下をスコップで掘りはじめた。

俺は黙ってそれをただ眺めていた。

なんでここにいるんだろうな。

そんな、疑問が脳裏を過ぎる。

佐倉田は、なんで俺を誘ったのだろうか？

考えても答えはでない。

多分、その答えは俺の中にはない。

「ふう……」

別に興味なんかないけど。たまには触れないと駄目だな。ただの気まぐれだ。

俺は地面に突き刺してあった大きなスコップを引き抜いた。

+++++

「佐倉田。今、何時だ？」

「11時を少し回ったところね」

まったく。俺は一体何やってんだろうな。

佐倉田と桜の木の下の掘り始めて数時間。

太陽なんかとつくの昔に沈み、辺りが真っ暗になってかなりの時間が経っていた。

その間、俺と佐倉田はただ黙々と無言で土を掘り続けた。

おかげさまで、俺達が掘った穴は佐倉田はすっぽり、俺は肩の辺りまですっぽり納まるまでになっていた。

今更だが、こんな所にこんな穴を掘ってしまつてよかったのだろうか

か？

まあ、どうでもいいか。まずかったとしても、その時はその時だ。当たり前だが、いくら掘っても死体は出て来なかった。

この成果に落ち込んでいいものか、喜んでいいものか、微妙なところだ。

「まだ掘るのか」

「後少しだけ」

何度目かの同じやりとり。かれこれ二桁近く同じやりとりをした気がする。

俺もそのたび後少しだけ付き合おうと考えた。

流石に俺でもここまで掘ると諦めが悪くなるもんだ。

何にもないとはわかってはいるが。

何かあるんじゃないかと期待せずにはいられない。

俺も馬鹿だな。

また、無言で手を動かす。

そういえば、腹減ったな。

「ねえ、佐々蔵」

不意に佐倉田が口を開いた。

「なんだ？」

「ありがとうね」

「……」

佐倉田の口から出て来た言葉は俺への純粋なお礼の言葉。

「ありがとうね」

「二回も言うな」

だいたい、俺は佐倉田に礼を言われたいから穴掘りしてるわけじゃないんだよ。

また、無言。二人でただ土を掘り続けた。

「あ」

そんな時だ。

「どうした？」

「これ」

聞くと佐倉田は今まで掘っていた地面を指差す。

俺は指差す先に目を向ける。

佐倉田が指差す先　そこにあつたのは……。

「なんだこれ？」

それを見付けたのがスタートの合図。

くるり、くるりと俺と佐倉田の運命が廻り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494g/>

三色

2010年12月26日02時52分発行